

## 第2部 最終報告会 & 外部評価会記録

日時 平成22年12月10日（金）13:00～17:10

場所 豊田高専図書館（豊田市栄生町2-1）

外部評価委員

富山高専副校長	成瀬喜則教授
豊橋技術科学大学高専連携室長	若原昭浩教授
岐阜高専一般科目（人文・英語）	亀山太一教授（全国高専英語教育学会会長）
徳山高専一般科目（英語）	国重徹教授

【神谷】 それでは時間になりましたので、ただいまから約1時間、外部評価委員の先生方による評価、そしてフロアの皆様から忌憚のない意見、御質問を承りたいと思います。

本日の1時間の内容は、最終報告書にまとめ上げます。その関係上、この1時間は、委員の先生方の前にもマイクがありますが、録音させていただきます。そして、録音内容をテープ起こししまして、報告書にまとめさせていただきますので、前もって御了承願えればと思います。よろしくお願いいたします。

まず、最初に評価委員の先生方4名、それぞれ本当に時間が短くて申しわけありませんが、10分程度以内で評価をいただきます。その後、残り時間はフロアの皆様から忌憚のない意見をいただければと思います。

では最初に成瀬先生、よろしくお願いいたします。

【成瀬委員】 よろしくよろしくお願いいたします。富山高専で、国際ビジネス学科に所属し、国際教育センターのセンター長をしております成瀬と申します。よろしくお願いいたします。

このプロジェクトの目的はグローバル社会に対応できるための基礎的な英語運用能力を備えた人材の育成ということで、いろいろな教職員の協力のもとで行われていると理解しています。

今回、評価の対象が2007年度から2010年度ということですがけれども、2002年度から長期にわたって実践されているということで、大変貴重なプロジェクトであると考えております。

私は英語の教員ではありませんが、一般教科、電子制御工学科、国際ビジネス学科といくつかの学科を異動しておりますので、その間、国際交流教育の経験や、国際教育センターで幾つかプロジェクトを立ち上げた経験などがあります。そういう観点から評価をさせていただきたいと思います。

評価の観点でございますが、私は5つ考えてみました。まず、教育GPの評価の観点として掲げられておりますのが、①具体的な目標値の設定がなされているか、②社会への情報提示がなされているか、③PDCAサイクルが確立されているかということです。これ以外に、高専という教育機関での有効性をはかる観点としてさらに2つ加えて5つとさせてい

いただきました。順番に説明、評価をさせていただきたいと思います。

まず1番目ですが、具体的な目標が明示されていて、その達成度について評価されているかということです。私は教育工学という分野の専門を持っておりますので、教育工学的に了解性があるかということについても評価をしてみました。本プロジェクトの場合は、多読用の本のレベルや読書量と、TOEICやACEでの得点との関係をあらゆる角度から分析されているということで、検証的には十分理解できると考えます。電気電子システム工学科（E科）卒業の専攻科生に対しては、90万語の読書量でTOEIC平均500点、それから全学科3年生の45万語の読書量で380点という実績に基づいて具体的な目標値を定めておられることは、非常に大事なことだと思います。

さらに、その目標を達成した専攻科の学生もきちんと分析されています。単に到達したかしないかではなくて、例えば多読授業を経験したE科の学生と多読授業を経験していない学生の比較もされており、多岐にわたった分析をされていることを評価したいと思います。

また、もともとモチベーションが高いとは言えない1、2、3年生の全科の学生を対象にして、本来の目的を達成できなかった原因を客観的に分析されているということは非常に重要なことかと思えます。報告書の図9ですが、読書量とTOEICの点数分布というものに着目して、読書量とTOEICの平均得点には明確な関係があるということをきちんと示しておられます。そういう意味では、了解性の高い結論になっていると思います。

生データがなかったので、学生の獲得した得点を階級値として見まして、図9の結果を分散分析で分析してみましたところ、各読書量には有意差が得られましたので、分析結果も十分信頼性があると思います。

結論として、TOEICの平均380点が達成できなかった原因が明確に分析されているということ、易しい英文を読むという鉄則が守られていない場合は効果が見られないということ、45万語から65万語が380点というTOEICを取るには必要であることを客観的に示しておられ、データの信頼性は高いと思います。

2番目は社会への情報提示ということです。さらに、社会への広がりということについても評価しました。本プロジェクトは、学内・外向けにいくつもの研修会とか公開授業がなされています。特に24回にわたる月例会、51回にわたるイブニングセミナーや公開授業など多くの取り組みをされて、社会人にも対象を広げて活動されたということは重要です。多読授業の有効性を学外に広げようとしたスタンスというのは高く評価できます。

また、本プロジェクトでこれまでの実績をもとにしまして、数量的な効果を試算されています。まだ、学外への大きな広がりはまだ見せてはいないまでも、その可能性があると考えます。例えばE科の取り組み、それから本科1、2、3年生の取り組みをもとにして、英語圏への留学、それから通常授業、多読授業の効果をTOEIC点数で換算するという試算があります。これは大変ユニークで、説得力の高いものだと思います。英語圏の留学経験が1時間当たり0.27点、通常授業が1時間当たり0.35点、そして通常授業の効果を差し引

いた多読授業の効果が1時間当たり0.37点という試算をされています。これは、多読授業の重要性というものももちろん示しているのですが、海外留学の効果を上げるにはどうすればいいとか、通常授業も実は非常に重要であるということも示しておられます。そういうデータは、学外へこれから広がりを見せる場合には非常に必要であると思います。

3番目は、目標が明示されてカリキュラムの中に位置づけられているか、さらにPDCAサイクルが確立されているかということです。もともとE科で導入されたいろいろなシステム、たとえばWebシステムによる教育であるとか、音読筆写の自宅学習支援をされながらも、学生に脱落者が出たというようなことで多読授業に着目をされております。その後、英語科と教育改善の推進室での協議を始められて、教育改善がスタートしていること、本科から専攻科に至るまでに1単位の授業をカリキュラムの中に位置づけられていること、読書記録手帳の学習記録を参考にして学生への指導を行っていることや、上級生が下級生にアドバイスするTAシステムを採用してフィードバックを回していることも考えますと、十分PDCAが働いていると考えます。

一つお聞きしたいのは、E科の場合はそういうアドバイスシステムというのがありますが、他学科への導入を考えておられるのか、あるいはその可能性があるのかということです。

4番目は、一般科目と専門科目、あるいは一般科目担当教員と専門科目担当教員の連携についてです。これは、高専でいろいろなプロジェクトをやる上で大切なことですが、そのような連携の有無というものについて見てみました。

E科では、一般科目、それから専門科目の中に単位を位置づけて連携しているというところは高く評価できると思います。ただ、それ以外の学科が今後そういう形をとっていくのかどうか、また、4年生以上の全学科で多読授業を広げることを考えておられるかどうかということを報告書からは読み取れなかったので教えていただければと思います。

5番目は専門科目への有効性についてです。専門科目で多読授業を単位化される場合、何らかの専門性を持たせた方がいいのではないかと思います。報告書では、確かに易しい内容の英語の文章でないと教育効果が得られないと書いてありますが、英語の授業で扱う内容と専門科目で扱う内容には若干の違いがあってもいいのではないかと思います。専門科目で多読授業と、一般科目での多読授業の関連性について教えていただければと思います。

以上、5点について評価報告をさせていただきましたが、全体的に非常に有意義なプロジェクトになっておりまして、今後、他高専へ広がる可能性を十分期待できていると思っています。今後、この成果を各方面で報告していただければと思います。

以上で評価報告とさせていただきます。ありがとうございました。

【神谷】 ありがとうございます。今、御質問もいただきましたが、後ほど時間があれば、私か西澤の方から回答させていただきたいと思います。

では、次に若原先生、よろしくお願ひいたします。

【若原委員】 若原でございます。私自身は専門の科目を通して英語を教えています、英語教育の方法論まで深く判断することが難しいということで、基本的には教育システムを構築して、それをいかに持続させるかという観点と、ここで構築されたシステムによる英語の運用能力を、さらに受講した学生の生涯学習に結びつけるという観点から見させていただきました。

まず、システムとしては、単位化されたカリキュラムに組み込まれていて、学生がきちんと学習の時間を取れると。これを課外活動的に実施すると、おそらく絶対定着しなかったと思います。それを時間確保が担保された形で実践されたことは非常に素晴らしいと思います。この計画を実施するためには、学校の教育システム全体を変える必要がありますので、どこの高専、大学でもすぐに採用できるものではないと思いますが、このプログラムで得られた結果を踏まえて、徐々に実施機関が広がっていけば良いシステムと思います。

それから次ぎに、読書手帳を渡して学生が自分でどのぐらい英文を読み込んだかを自分で確認できるシステムが採用されていることは、非常に重要だと思います。やっぱり人間ですから、何をどの位読んだかを定量的に振り返られるものがないと長続きしないと思います。モチベーションを持続させる上で非常に良い方法だと思います。

一つ気になった点が有ります。今回のシステムは英語科の先生と電気科の先生方が中心に実践されたということですが、特定の先生だけが非常に頑張って運用されたという可能性はないでしょうか？今回のプロジェクトでの取り組みを長続きさせようとする、このシステムに賛同し、高専全学でこれを盛り立てていくようなシステムにしない長続きしないと思います。例えば、西澤先生が定年になられたら担当者が少なくなってパワーダウンしましたということではいけないと思います。それから、データからは学科によって効果に差がでている様に思われます。この点については、原因をチェックして何かアクションをとられたのか、あるいは実施期間が短かったので、チェックに基づき次のプランを立てたところで、これから実践する段階にあるのかが、今日の説明や報告書では見えませんでした。以上の2点をシステム構築とPDCAに関する質問として挙げさせていただきたいと思っております。

次ぎに目標値の設定に関して、今回はTOEICを採用されていますが、これは受講している学生自身にとっても非常にわかりやすい指標ですし、外部に公開しても誰が見てもわかる評価なので大変良かったと思います。私自身も、実は西澤先生に英文多読法を豊橋技術科学大学の電気・電子工専攻の講義としてお願いしていますが、学生自身による自発的英文多読はなかなか長続きしない、長続きしないのでTOEICの点数が上がらない問題を抱えています。その一方で、彼らはTOEICの成績向上と言う結果が欲しいので、結局のところ試験対策に走ります。西澤先生は、試験対策をしないことを表して「ドーピングなし」での結果をもって評価すると言われております。試験対策なしのぶっつけ本番で受験した成績を評価指標として採用されたのは、このシステムの効果を客観的に得る上で非常に良い考え方だと思います。

ただし、多読の効果のみを把握するために留学経験者を除いたデータで解析しておられますが、多読の取り組みで英語能力が向上して「じゃあ留学してみよう」と思った学生のデータも省かれてしまうと、結局英語の能力が大きくなかった人のデータだけの評価となり、点数が低目に出ている可能性はないでしょうか？報告書では、海外留学した学生さんの割合が分からないため、データの分析方法に関しては、この点がきになりました。

最後に運用能力についてですが、指標として今回の取り組みはGPと言うこともありTOEICの点数を採用されていますが、会話能力については如何でしょうか？聞き取る能力は、TOEICの試験項目に入っているので恐らく大丈夫と思いますが、会話能力については判断できないと思います。実際、卒業生の大多数は技術者として社会へ出ていきます。我々もそうですが、最近は外国から直接英語で電話がかかってくる時代ですし、企業では何かトラブルがあれば直ぐに現地に飛んで対応することが求められています。勿論、英語が聞けるということは大事ですし、文献を読めるということも大事です。でも、このプログラムを受講した卒業生が社会に出たときに一番大事なものは、ちゃんと話ができるということだと思います。TOEICの点数を引き上げる目標はクリアしたということで、次のステージでは、英語による会話、コミュニケーション能力の向上を目標に置いて実践していただくと、高専だからできる英語教育の確立に結びつくと思い非常に期待しています。

全体的に、非常にいい取り組みで、すばらしい成果が上がっていますので、是非この後も全学を挙げて推進していただけるようお願いしたいと思います。

以上で評価とさせていただきます。

【神谷】 ありがとうございます。続きまして亀山先生、よろしくお願ひいたします。

【亀山委員】 岐阜高専の亀山です。評価というのはおこがましいとは思っておりますけれども、前のお二方が英語の先生ではなかったもので、高専英語教員の一人として思ったことを言わせていただきます。

今回の発表を聞かせていただいて、これは高専における多読による英語教育のノウハウを確立した金字塔と言ってもいいのではないかと感じております。データが統計的に処理されており、エビデンスとしてしっかり出されていること、そして目標値を具体化して、ここを超えれば効果が出るというスレッシュホールドを明示しておられます。このあたりが英語教員にはなかなか難しいところです。多読を使った英語教育のノウハウを確立したということで、私が「豊田モデル2010」と命名させていただき、私の評価とさせていただきます。

私は、多読が英語学習において効果があるということは、経験的にも最初からわかっております。しかし、それを実際に授業でやろうとすると様々な障害があり、これをいかに乗り越えていくかということが問題なわけです。ですから、いろんな方が多読を使った英語教育にチャレンジされますが、それが必ずしも成功しないことがあるというのは、ノウハウが共有されていなかったということが一つの問題だと思います。

これによく似ているのが、実はダイエットなんですね。本屋さんへ行きますと、英語学

習の本がいっぱい並んでいます、それと同じぐらいの面積で並んでいるのがダイエットの本です。両者に共通するのは、ハウツー本を買ってきて自分でやってもほとんど効果がないということです。効果があるなら、特定の本だけが売れてその他の本は売れなくなるはずですが、実際には次から次へといろいろなことが書かれた本が出てきます。それはつまり、どちらも方法論が問題なのではなく、継続できるかどうかということの方がはるかに大きな問題だからなのです。

「毎日少しずつ継続して易しい英語を読み続ければ英語力が上がる」というのはわかっているわけです。これをダイエットに置きかえますと、「楽な運動を毎日続ければ余分な体重は減らせる」ですよね。たとえば、毎日30分歩きましょうとか。ところが、続かないんです。今日は休で、明日2倍やろうかなとか、1週間分まとめて20キロ歩こうとか言っても、それは無理ですよね。さっきの話で言うと、難しいものを一気に読んでも効果がないということと同じことだと思います。

これを克服する方法の一つが、「みんなで一緒にやりましょう」というやり方です。それから、ペース配分を一定に保つことも大切です。そして、効果があったかどうかということ、体重計に乗って定期的に測定して、体重が減っているということを実感しながら継続する。その結果1年かかって5キロとか10キロ下がれば、ああこのやり方は効果があるということになるわけです。そしてそれを口コミで他人と共有することで、じゃあみんな一緒にやりましょうかという流れができてくるわけです。そういうノウハウを確立させることの重要性が、英語教育においてもダイエットにおいても同じように言えると思います。

また、ダイエットでも英語でも同じですが、それを見守るトレーナーの役割というものが重要になってきます。毎日30分歩きましょうといっても、その30分という時間をどうやって作るかを見守る人が必要です。自己管理は非常に難しいですからね。毎日30分、時間が来たから一緒に散歩行きましょうといって誘ってくれる人がいるかどうか。それから、どれぐらいの運動量をすればいいか、すなわち10キロ歩くのか、15キロ歩くのか、それとも3キロでいいのか。あるいはどれぐらいのスピードで歩けばいいのかということを知っている人。適切な速さ、適切な分量を決めることのできる経験者が、ちゃんとそれに沿った動き方、学び方をしているかどうかを見守って、足りなければ励ます、行き過ぎていればちょっとペースを落とささいと言ったりできる人がいるかどうかです。

また、歩くだけじゃなくてジムへ行ってみようとか、たまには水泳もやりましょうとか、こういうプラスアルファの誘いができる人がいれば最高です。そのときにも同じように、やり過ぎたらだめですよということを言わなければいけません、どこまでが適切でどこまでがやり過ぎかということを知っていないと、それはできません。それにはやはり自分でやった経験が必要です。先ほど西澤先生が、自分でも体験しなきゃだめだよとおっしゃっていました。自分でやってみて力をつけたという経験がないと、他人にアドバイスはできません。知識・経験が必ず必要になってきます。今まで多読をやったことがない人が、

じゃあ明日からやってみようと思ってやってみても、成功することはまれです。ですから、先ほど豊田モデルと言ったのは、これをモデルにすべきであるという意味です。聞きかじった知識で多読はよさそうだと思って、多読の本を読んでその通りやってみようと思ってもらいたい失敗しますので、実際にやった経験のある、たとえば西澤先生や神谷先生に教えを請うた上で、各高専で実施する必要があります。あるいは高専の枠を超えたところでプロジェクトチームを作ってやるとか、勉強会をやるとかですね。今日は、そういうことを始めるきっかけになったのではないかと思っております。

先ほどの話にあったように、多読実践は長期的にやらないと効果が出ません。高校の3年間でやってもおそらくかなり難しいと思います。それから、大学1年生からやってもちょっと遅いような気がします。今回の実践は、高専ならではの、すなわち「高専生だから英語ができる」という、西澤先生のスローガンを実現するための一つのきっかけになるのではないかと思っております。

今回の豊田高専の実践は、100%完璧だとは言えないかもしれませんが。先ほど2人の先生がおっしゃったように、まだ課題はあるとは思いますが、多読の一つのノウハウを確立したものと言えらると思います。私が「(豊田モデル) 2010」と数字を入れたのは、これからまだバージョンアップしていこうという予想からです。他の高専でもやってみようかなと思っても、いきなり明日からというのは無理だと思いますが、2010年バージョンの豊田モデルが、とにかく多読をやってみるための一つの参考になるという意味で、今回の実践を評価したいと思います。

【神谷】 ありがとうございます。

では、最後に国重先生、よろしくお願いいたします。

【国重委員】 徳山高専の国重です。多読・多聴の評価に来て、亀山先生からダイエツトの話が聞けるといいうすばらしい副産物もありまして、うれしかったです。

さて評価ですが、まず一言で、全体としてこのプロジェクトを見たときに、高専生は英語が弱いと言われ続けてきている中で、その悪評を好転させる大改善をするための大きなきっかけとなる種を、西澤先生や吉岡先生を中心に、豊田高専がまかれたという点で、すばらしいものであると言えます。具体的な数値目標を示した上で、一部ではまだ達成されていないとは言え、特にE科におきましては相当高い成果も上がっていますし、同じ高専で教えている者として、これだけ高い成果が出るというようなプロジェクトは、かつて見たことはありませんので、そういう意味でも非常に高く評価できます。

豊田高専がまかれた種を見て、実は私もこの春から多読の授業を始めてみました。多読の授業という現場に立った者の一人として、そこを中心にコメントや評価をさせていただきます。詳しい数値データが示してありますから、取り組みの成果はよくわかります。しかし、具体的な授業の中身がこの報告書ではよく見えません。私が一番気になったのは、取り組みがあまりうまくいっていない学科で授業がどのように行われていたかという点です。特にあれだけ語数の目標に到達できていないということは、授業中におそらく読んで

いない学生がかなりいるのではないかと推測できます。私も自分で多読の授業をしている際に、学生が寝たり、本を頻繁に変えるだけで1時間過ぎたりしてしまうというケースがあります。そういう学生をどう指導するのかという点が大切になってくると思います。アウトプットとしてTOEICのスコアを上げるという目標のみであれば、授業中一切多読をしないで寝ていたとしても、授業外で読んでTOEICを受けて例えば800というスコアを取ればいいということになるのかもしれませんが、しかし、学校教育の一環として多読の授業をするわけですから、多読になかなか入らない学生や、全体として多読にのってこないようなクラスを、先生方がどのように多読に向けていくかが非常に大事になってくると思います。以上の理由から、先輩が後輩を引っ張っていくといういい循環の形ができていないE科ではなく、うまくいっていない学科をこれからどうやって立て直していくのかという点をまずお聞かせいただきたいです。

次に、先ほど亀山先生がされたダイエットの話に関連しますが、自分でダイエットもできていない私のような者に「こうするとやせるよ」と言われても、おそらく誰も耳を傾けてはくれないと思います。多読も同じで、多読を楽しんでない、もしくは、していない教師が多読の楽しさを学生に説いても説得力がないと思います。学生が「先生、次はどういう本がお薦めですか？」と尋ねた時に適切に答えられるように、教員もしっかり多読をして準備をしていなくてはならないと思います。多読という授業形態は、教員にとって一見楽な授業のように思えますが、実際にやってみると、従来の授業よりもはるかに大変だということがわかりました。教員も本を読み続ける必要がありますし、新しい本も追加してあげないといけませんし、この学生にはこういう本がいいだろうということを言ってあげないといけません。それを全学レベルでできるようにしようと思うと、多くの教員に対して相当なFDが必要ではないかと思えます。

そこでお聞きしたいのが、全学で取り組んでおられるということで、多くの先生方が多読の授業に携わっておられたと思いますが、そのFDをどのように実施しているのかということです。私も徳山高専で多読を広げたいと思っていますが、そこがよくわからないままですと気軽には広げられないです。自分もままならないのに、他の先生方に「多読は、ただ読ませておいたらいいですからお願いします」というわけにはならないですから。FDは、今後徳山高専で全学的な多読の授業の展開を成功させる鍵だと思いますので、そこを教えてください。

次にお尋ねしたい点は、もともとの学生の語学のレベルと、読んだ語数やTOEICなどのスコアの関係です。相当な語数を読んでいる学生がE科にはいますが、それはもともと英語ができるから楽に読めて、その結果語数やTOEICのスコアがすごく伸びたのか、それとも、もともと英語力は高くなかったが、多読指導の結果、たくさん読んだから語数やスコアが伸びたのかという点を知りたいです。多読の授業をまだ半年ちょっとしかやっていないですけれども、ACEという英語力診断テストでは、確かに、10万語以上読んでいるグループが、一番平均点が高く、その次が5万語以上読んでいるグループで、それ以下のグル



ープの平均が最も低かったです。しかし、それがもともと英語力のそれほど高くなかった学生群が10万語読んだから伸びたのか、それとも、もともとレベルの高い学生群だったから語数も多くなったし、スコアも高くなったのかということについてはデータを精査して見る必要があると思います。つまり、多読の成果として本当に英語力が伸びたのかどうかを示す必要があると思います。豊田高専の取り組みで、そのあたりがわかれば、教えていただきたいです。

次に、多読は長いこと継続して初めて成果が出るという点で、高専に合っているという話はわかりましたが、1年間10万語を10年続けて100万語読ませるのと、1年間25万語を4年続けて100万語読ませるのとでは、どちらが効果があるのかや、同じ本を何回も読むのと異なる本を読むのとではどちらが効果的なのかについても、教えていただきたいです。

また、豊田高専では図書館と連携して多読教育を実践されている点が素晴らしいですし、うらやましいです。徳山高専では残念ながらまだ多読の授業をしている教師が2人で、それぞれが小さい携帯用のカートを買って、それに数百冊の本を入れて毎回授業に行っています。購入した本については、何語あるかを調べ、それを示すシールや読みやすさレベルを示すカラーシールを一冊ずつ貼っていきます。そのような手作業が実は大変です。そこを図書館が協力してくださるとするのは高く評価できます。図書館とうまく協力する方法を是非教えてください。

最後に、繰り返しになりますけれども、総じて素晴らしい取り組みなので、是非これをさらにいい形で全国に広げていただければなあと思います。以上です。

【神谷】 どうもありがとうございました。

4名の外部評価の先生方の貴重な意見を今後生かしていきたいと思います。

それでは、今4名の先生方からのご質問の共通項について、私がお答えいたします。私は、現在英語科科目主任であり、国際交流委員長であり、また教務主事補という立場から全学的なカリキュラムにかかわっています。私が答えられる範囲内で、先に答えさせていただきます。

4名の先生方の共通項は、やはりE科とそれ以外の学科に、かなりの差があるという点だったと思います。そしてもう一つ、この全学展開が今後続くかどうかという2点に絞って話させていただきます。

まず、E科と他学科との格差は確かにあります。今日、西澤は、E科とそれ以外の4科を比較しました。この結果は、本日の評価会の前に、豊田高専では毎年1回行われる、英語科教員と専門学科教員の懇談会でも、かなり詳しく報告され、協議いたしました。今の段階では、各専門学科の実情に合わせて、英語学習に向けた雰囲気づくりをお願いしていくという形になっています。また、全学展開は来年も継続する予定です。特にE科の場合は、先ほどのカリキュラム表にありましたように、ほかの各学科と違って、電気の専門科目を減らして英語の授業に変えています。こういう英断をしています。ほかの4学科は、まだそこまで踏み切っていません。その差は非常に大きいと思います。これは英語科教員だ

けの意見では、どうにもならない段階です。ただ、西澤と私から各学科の先生方に言えることは、「多読は大切ですよ、みんなで多読をやりましょうね」という雰囲気づくりをお願いする程度です。E科は6単位の英語の授業を追加して、専門学科でやっており、ほかの専門学科より多くなっているのが現状です。それに加え、もちろん彼の人柄とか、リーダーシップはあると思いますが、どうしても差は出てきてしまいます。ただ今後、頻繁に会議を開いて、そのあたりは検討していきたいと思います。現在はまだ、ほかの学科は専門科目を削ってまで多読を入れようという動きまでは行っていないというような感じです。今後、大きな検討課題になると思います。

それから、入学時の学力差についても言われました。確かに入学時に5学科の間に、学力差はあります。どことは言えないですが、その関連もあります。あとはTOEICも、いろんな指導にも加味していく必要性は十分あると思います。

二つ目について。これで3年目の教育GPは終了ですが、来年どうなるのか？これで、もうバイバイというわけにはいかないですよ。これだけ多くの方に期待され、また亀山COCET会長には「豊田モデル2010」と言われましたよね。ここまで言われちゃうと、やめられないですよ。もちろんやめる必要はありません。まず一つは外部資金を取り続けるということです。現在、豊田高専図書館に多読用図書は約2万8,000冊ありますが、これには内部資金もありますが、西澤、それから英語科教員が外部資金を約1,400万取ってきております。今後も可能であれば英語科教員、または西澤も、外部資金獲得に努力します。文科省それから機構ですね、いろんなところへ申請を出す予定です。もし取れない場合も、これだけ実績ができましたから、若干修正する箇所はありますが、来年も全学展開で1年生、2年生、3年生と、英語科は全学展開で多読を、また、西澤、電気の先生と協力して一緒に続ける予定です。高専モデルは2010、2011と続けていきたいと思います。

そして、最後に留学生の話が出ました。西澤は、留学経験者を除いたデータを出していますが、留学へ行くことも異文化理解を含めて一つの語学教育になると思います。ですから、私がTOEICのデータを出すときは、留学経験者も含めたTOEICのデータを出しています。そうすると、平均点は大分上がります。今回はたまたま西澤の観点が、少し私と違って、こういう出し方をしていますが、もちろん留学も一つ異文化理解を入れた語学学習にも十分寄与しますので、今後も奨励していきたいと思います。

簡単ですが、私から今後の展開について補足説明させていただきました。

それでは、ここからは、皆様の方から、御質問でも意見でもいいので承りたいと思います。なるべく多くの方に意見をいただきたいので、できれば一人一つの質問にさせていただきます。質問のある方は挙手をお願いします。お名前と所属のあと、意見を言っていたきたいと思います。

では、どなたかどうでしょうか。遠慮なく。

亀山先生、行きますか。できればフロアからがいいんですが。

【亀山委員】 さっき私は一人だけ質問をしなかったもので、ここでちょっと意地悪な質問

をします。西澤先生は電気の専門科目で英語をやっておられて、科目名に「電気何とかコミュニケーション英語」のような名前がついていますが、多読に使うのはほとんど電気に関係ない本ですよ。シラバスはどうなっていますか。授業と、J A B E Eやシラバスの関係をちょっと教えてください。

【西澤】 きょうはシラバスを示していませんでしたが、科目目標には、技術者のプログラムの教育目標を達成するために、英語の通常の授業では、Fluencyが十分でないので、そこを補うために専門科目でやると書いてあります。科目名以外は、電気には直接な関係はないです。先ほど成瀬先生からの質問にもありましたように、じゃあ専門性はどこにあるんだということですが、現在の形は暫定的なものだと我々は考えています。例えば、現在、専攻科の1、2年では、吉岡が中心になって、インプット（多読はインプットです）の技能をアウトプットにつなげるという試みを、上の学年から始めています。それがだんだんつながってきて、最後には卒業研究、特別研究における研究発表とか、論文のアブストラクトに英語を使っていくということで、最終的には専門性が出てくる予定です。今は中間段階なので、科目名とシラバスの本体の記述に若干ずれがありますが、今後10年、20年かけて改良して行く暫定的な姿だと理解していただければと思います。J A B E Eでは、全然問題ないです。

【神谷】 J A B E Eという、高専の先生以外の方はちょっとわからないような内容で申しわけないんですが、身内だけの話になりましたけど、問題なくカリキュラムをうまくやっているということで御理解いただければと思います。

では、皆さんどうぞ遠慮なく挙手をお願いします。

ではお名前と、所属があれば申し出て、お願いいたします。

【阿部先生】 八戸高専の阿部と申します。一つ、TOEICについて質問させていただきたいと思います。

今まで、多読授業というすばらしいプロジェクトをされて、評価は学生の英語能力をTOEICでずうっと評価をされてきていますね。もちろん高専ではTOEICによる評価が大事ですが、先ほども評価委員の先生からお話があったとおり、英語の運用能力という点で、例えばTOEICで600点、700点取っても、コミュニケーションができないという場合も多くあると聞いております。今後、この多読のプロジェクトを続けるに当たって、ずうっとTOEICという外部評価、外部試験のみで評価をしていくお考えなのか、それとも別な方法で多読の授業を評価していかれるのか、お聞きしたいと思います。また、これまでも長く続けてこられていますが、今日の発表からは、ACE、TOEICのみで評価しているように、私は理解しましたが、それ以外での評価が、もしありましたら、教えていただきたいと思います。よろしくをお願いします。

【西澤】 ご質問は二つあったと思います。一つ目は評価指標がTOEICだけかという問いですが、TOEICで測ろうとしている受動的な運用能力は、我々の考えでは能動的な運用能力のベースだと思っています。高専卒業レベルでは、相手の言っていることがわかって、

やさしいものが読めていれば、しゃべる方は片言で十分と理解しています。そのレベルをTOEICで測ると600点ぐらいじゃないかと思います。ドーピングなしで600点ぐらい取れば、ゆっくり話してもらえば相手の言っていることは何とか分かる。英文がやさしければ何とか読める。もちろん、自分の言いたいことはキーワードくらいしか言えないと思いますが、これが高専の本科及び専攻科の目標レベルだと思っています。

今、学生の現状は600点より低いところにありますので、TOEICでよいと思っています。学生のTOEIC得点が800点を超えたらTOEICだけでは足りないと思いますが、それまでは大丈夫だと思っています。また、さきほど申し上げましたが、新人技術者にとって大切なのは、英語から逃げないことなので、まず重要なのは、聞いてわかることと、読んでわかることです。話すことは、現場に入ってからでも十分と理解しています。

それから、もう一つのご質問の科目成績の評価については、別紙でお配りした資料に、「成績評価はどうしているか」という疑問にお答えする形でまとめてあります。ご覧いただくと分かりますが、科目の成績評価で一番比重が重いのは、定期試験です。いずれの学年も40%の評価はリーディングの定期試験でやっています。TOEICによる成績評価は、おおよそ30%から40%です。全く入れないと学生が記録をつけなくなるので、読書記録手帳から拾った自己申告による読書語数を10%ぐらい入れています。定期試験でやっているリーディング試験は、学年が進行するにつれ、だんだん長く、レベルが高くなる英文を初見で読ませます。制限時間内に読み切り、概要を把握できるかを評価します。科目成績評価としては、読みの力の評価比重が重いことになります。

例えば、専攻科1年生のところでは、英文の全語数が6,000語で、読書時間1時間です。60分で6,000語、YL2.8の英文を読ませます。読み切ろうと思ったら、かなり読めないと寝てしまうレベルです。また、試験問題には、なるべく学生が読んでなさそうなものを選ぶので、内容がおもしろくないものが多くなります。なので、眠らずに最後まで起きて読みきることができるかどうか勝負になります。初めの2年生、3年生にとってはちょっときついところもありますが、5年、6年生ぐらいになると試験勉強が要らないので、気軽に来て、口笛を吹いて去っていくという感じで試験を受けます。学生の評判はいいですよ。

【神谷】 ほかに御質問ある方、挙手願います。

【高瀬先生】 近畿大学の高瀬と申します。よろしくお願ひいたします。

質問ではないのですが、先ほど成瀬先生から、専門科目への有効性というので御質問がありました。これは私も多読をやっている英語教師の一人として大きな課題だと思っています。文学を専門にされている先生からは、易しい本と本物の文学、つまりオーセンティックなものとのギャップをどうやって埋めるかとか、理系の先生からは、専門書を読ませたいのに易しい本ばかり読ませて、専門英語までどうやって持っていくかという疑問（最初から専門英語を教えるべきではないのかというご意見）を、かなり強くきつく問われます。ところが、これまで多読というものが、あまり知られていなかったときは、学習

者の実際の英語力とオーセンティックな英語や専門英語とのギャップなど問題にすらされずに、学習者は直接難易度の高い専門英語を詰め込まれて、あっぴあっぴの状態だったのです。本来ならば、この多読指導を中学から始めて、基本的な英語を大量にインプットしながら基礎力をつけたのち、上級学年・学校に進むというのが理想的なのですが、現実にはそうはなっておりません。そこで、英語の基礎力が付いていない高専生・大学生を対象に、多読を通して中学でやるべき基礎力養成をする必要があるのです。また、専門用語習得には、ネイティブの子供たちが小学校で使用している社会や理科の副教材であるノンフィクションの本などを大量に読ませて、専門用語とその状況にあう表現を学習させる必要があります。英語の基礎力が不足している学習者に最初から専門書に取り組みせれば、英語に対する苦手意識から拒否反応がおこり、結局は習得できない恐れがあります。その点、子供用の本は抵抗が少ないため英語習得には効果的です。小学生用のテキストでも専門用語は同じ語彙が使用されていますので、抵抗が少ない本（絵本を含む）を利用して語彙を培っていくことができます。遠回りのようで時間もかかりますが、現状ではこの方法が唯一可能で一番確実な方法なのです。また、西澤先生がおっしゃったように、今後は、受容的スキル、つまり読み聴くという受身の運用能力だけではなくて、書いて発言できる能動的スキルを身につけなければなりません。現在ESP(English for Specific Purposes)の部門で工夫がなされていますが、論文を書く能力を養うには、多読と同じ方式で、多書(Extensive Writing)を行うのが一番効果的だと思います。それぞれの分野でパターン化された専門的な表現を、少し易しい形で導入し、沢山書かせて徐々に習得させていくのです。その点は我々英語教師がもっと工夫すべきところです。西澤先生たちが英語の先生でないにもかかわらずこれだけやっていらっしゃるので、我々はもっともっと頑張らなければ、と思っております。最良の方策は多読・多聴・多書・多話が英語学習の初期段階から導入されることですね。

【神谷】 ありがとうございます。今のは御質問というより、御指摘という形で御意見ということで、西澤さん何かコメントありますかね、それに対して。

【西澤】 じゃあ、難しいところだけちょっとお話しします。

実は多読をやっていると、豊田高専でやらせる限りは、ノンフィクションを強要すると、多読が進まなくなります。推定するに、ノンフィクションは、かなり細かいところまで理解できていないと、つまらなくなる。お話、すなわち、フィクションは、理解度が浅くても、あらすじを追っていければ楽しむことができるのです。ここで、専門に関連したものを読ませることを教員側が焦ると、逆に学生が読めなくなってしまうのです。ほかの現場ではわかりませんが、豊田高専では、どちらかというとも低学年を中心にフィクション、物語の方を強く勧めて、読めるようになってきた学生とか、中にはノンフィクションでないと読みたくないという、かなり少ない比率の学生がいるので、そういう学生を中心に、だんだんノンフィクション系に誘導していくという工夫が必要だと思っています。ですから、長期でやれば、終わりの方には専門につながっていくと考えています。

【若原委員】 専門の立場から今のコメントに関して、私は非常に英文多読は役立つと思っております。というのは、大体日本人の特に技術者は、英語を読むときは、英語を読んで頭の中で単語を調べて日本語に翻訳するんですね。大体学生がとんちんかんな訳をしてくるのは、自分の知っている知識を日本語で作文をしているんです。これが一番の問題なんですね。ところが、我々も専門の英語は教えています。輪講のとかゼミとかで全部やっていますけれども、必ず初見で頭から読んで、英語の文法のとおりになんか日本語になんかなくてもいいけれどもそのまま訳しなさいということでやらせています。英文多読をやって読み込んできた子にやらせると、それが比較的容易にできるようになってきます。ですから、英語として文章を理解して、そこから専門知識を引き出してくるということで、いろんな構文が重なっていても、内容を履き違えて、間違っただけで理解をしないということで、実は専門にとってこれが一番重要だと考えていますので、そういう意味では、非常に多読のやり方で勉強してきた子というのは、専門においても重要な能力を身につけているというふうに私は考えています。

【神谷】 今、西澤先生と若原先生は、どちらかというと専門の先生。今度は英語のプロパーからして亀山先生、何かお願いできますか。

【亀山委員】 今の話を聞いて、多読の中でその専門の文献とかノンフィクションとかを入れるのはよくないだろうと思いました。ただし、多読でフィクションをいっぱい読んだ子は、ノンフィクションあるいは専門文献を読んだときにもすんなりと読めるようになるだろうということじゃないかと思います。

【高瀬先生】 学習者の中にはフィクションしか読まない学生、フィクションで英文に慣れてノンフィクションに移って行くという学生、数は多くはないですが、ノンフィクションが好きで最初からノンフィクションばかり選ぶ学習者もいます。西澤先生の学生さんは、ノンフィクションはあまり続かないということですが、私の学生はノンフィクションを好む学生が、(理)工学部だけでなく、法学部や経済学部にも毎年います。ノンフィクションを好む読者は、どちらかといえば男子学生に多いのですが、本のシリーズによって、また各人の好みにより、女子学生でも特定の分野のノンフィクションに目がない学生がいます。そのような学生には本人が好むままにノンフィクションを選ばせております。好きな分野の背景知識があるから読みやすいのだと思いますが、これには個人差があります。

西澤先生がおっしゃったように、確かにフィクションであれノンフィクションであれ、基本的な英語というのは一緒ですから、それをまずクリアしてしまわないことには、専門書も何も読めないのではないかと思います。どうもありがとうございました。

【亀山委員】 ついでに言いますと、ノンフィクションとか専門というのは、筋道が立っていないと結論が出てこないんですよ。つじつまが合わなくなってしまう。ところが、フィクションというのは、適当に自分で解釈して適当に自分で結論を出すことができます。私は子供のときに、結構細かい字の本を読んだことがあって、今思うと全然わからずに読んでいたなあという気がしますが、やっぱり読んだ文字数はそれだけ多いわけで

す。小学校のときに松本清張を読んでいたんですが、何を読んでいたか思い出せないんです。ただ本の数はそれで稼いだなあという気はしています。要するに、つじつまが合わなくても何とかなってしまうのがフィクションの方で、数を稼ぐにはそっちの方がいいんじゃないかという気はしております。だから、西澤先生がノンフィクションだと止まってしまうというのは、そこに何かがあるんじゃないかなあという気はしました。

【神谷】 コメントどうもありがとうございます。では、どうぞ。

【高橋先生】 三重県の津高校から来ました高橋と申します。

何回か、西澤先生それから吉岡先生の発表を聞いていつも感銘を受けております。多読・多聴による英語教育改善の全学展開と、多読のことは、そのとおりでと思いました。西澤先生ならではというか、英語の教師でないから、逆にこういういろんな統計的なデータも含めて、いい論文というか発表を聞いたのではないかと思います。私が聞きたいのは多聴のことで、きょうの資料にも、聞き読みを積極的に行っていると書かれています。後期に入ってから、聞き読みを積極的に行っていますとか、CDを大分そろえておられるとか、多分多聴の方も、これからもっと進めていかれるのだろうと思いますが、その辺をどう今やっておられるのか、それから、これからどうしていかれるのか教えていただきたい。本当は、多聴の方が先に来てもいいかもしれません。クラッシュのインプット理論によると、これはもう間違いなく多聴も多読も一緒に、しかも翻訳せずに、ということであるなら、特にそう思います。脳が自動的に音声処理や言語処理をしていく上では、同じようなところもありますし、違った面もあるでしょう。多聴については、きょうの発表であまりなかったと思います。この報告書にも、タイトルは多読・多聴と書いてあるけれども、多聴についての現状と今後の方向性を聞かせていただけませんか。

【西澤】 ありがとうございます。では話していませんでしたので、多聴について多少話してみたいと思います。

私も多読を始める前は、読むよりも聞くことを先に持ってきた方がいいだろうと思っていましたが、実際に始めてみると、読む方が易しいようです。その理由として、絵があることも大きいです。挿し絵がある絵本を読む方が、音だけ聞いてわかるよりも易しいのです。大雑把に言うと、先ほど出したYLで、音を聴かずに読むだけで易しく読めるレベルと、テキストがなくても聴いて分かるレベルは、YLで2ぐらい違います。YLで3ぐらいを読める学生は、YL1のものをテキストなしで聴かせても、そのまま分かるという感じです。

授業では、入門期は、朗読音声ペースメーカーとして聴き読みをさせています。目的は翻訳防止、または、戻り読み防止です。内容理解は、どちらかという音からではなく、テキストと絵からで、音声は読みのペースメーカーになります。学生がYL3ぐらいのものを読めるようになってきたら、YLを二つ落とし、読んだことがない本を朗読音声だけで1回聴いてみることを、時々やらせています。結論として、実は多読の方が多聴よりもやさしいので、そちらを先にやっています。ただ、特に翻訳する癖が強い学生の場合には、音声を併用すると早く翻訳から脱却できるので、聴き読みは効果があるのではと思っています。

す。

【神谷】 多聴のことについて説明させていただきました。

じゃあ先ほどお手を挙げられた方、御質問ある方は……。

【岡林先生】 名城大学からまいりました岡林です。

フィクションとノンフィクションのことをちょっと興味がありまして、今注目をしてやっております、そのうちに発表したいと思っておりますが、私の経験ですと1%ぐらい、クラスの中にノンフィクションばかりというのがいます。その子たちがどうなるかという、読み込んでいって、20万語ぐらいを過ぎますと、フィクションに移っていくというのが私の経験で、西澤先生の御経験と大分違っております。エディンバラ大学のヒル先生などは、エクステンシブ・リーディングはフィクションが良い、ノンフィクションではだめだとおっしゃいますけれども、私は学生に興味を持たせる、特に理科系の男子学生に興味を持たせるということに関しましては、ノンフィクションがあることが大変に有効であると思っております。単にちょっと関連したコメントというだけで、申しわけございません。

【神谷】 ありがとうございます。貴重な意見ですね。

ちょっと時間が過ぎていますが、あと2人ぐらいどうですかね、先生。どうぞ。

【清水先生】 富山高専の清水と申します。きょうは貴重な講演を聞かせていただきまして、ありがとうございます。

今、話の流れが英語の中身の方に入っていったので遠慮していました。ちょっと話の流れを変えてしまいますが、よろしいですか。

富山高専でも、多読を何とかできないものかと、あれこれ考えております。今日のお話にもあったとおり、一人ではできない。徳山高専の国重先生もおっしゃっていたように、いろんな先生と少しずつ連携して共通理解を図り、協力して進めていくことが大事なんだろうという話になっています。図書館の方にも入っていただき、専門学科から各1名、専攻科からも来ていただいて、私は英語なんですけれども、7人でチームを組んで共通理解を図り、できるところから始めてみようとしています。先ほどもあったとおり、いきなり全学科全展開するのは難しいと思います。豊田高専では、2002年、2003年からやっていらっやって、ここに至るまでの間にいろいろ試行錯誤があったと思います。きょう、話し切れなかったこともあると思うんですけれども、失敗談というか、ちょっと壁になっていたとか、それを乗り越えたところとか、何かそういうようなエピソードがあれば、少し聞かせていただくとありがたいと思います。

【西澤】 多分、ブレイクスルーになったのは、お金だと思います。最初に吉岡と私が多読授業を始めたときには、2人の研究費から10万ずつ出して、学科から10万もらって、30万で600冊の本を購入しました。このときは、さらに図書の数を増やしていく自信はありませんでした。その後、神谷先生を始め、いろいろな人が予算を確保してくださり、多読用図書を図書館に入れてもらいました。図書館に2,000冊、3,000冊ぐらいに入ったところ



ぐらいで変化がありました。もちろん教員が多読用図書を自ら読んでいて、選書指導できることも重要ですが、学生から見た場合、多読の魅力というのは自分で好きな本を選ぶことにあります。本当は誘導されているんですが、自分で選んでいるという幻想を持つところが重要なので、本が豊富にあることは、すごく重要です。本は、これしかないから、これを読んでおきなさいと教員が言うのでは苦しくて、学生が自分で選べるところまで図書の種類を増やすには、それなりの予算確保が必要です。

【神谷】 教育G Pで、今これだけの大きな展開になっているんですが、裏の裏を言えば、これは平成16年、英語科と専門学科、それらのリーダーシップ、当時の校長、きょうの校長じゃない、前の校長なんです。前校長と英語科専門、それはすごい話し合いをいたしました。わかりますよね、理系と文系の違いです。そこは大きな壁だったですね。それを乗り越えられましたかね、乗り越えたとお互いに思っておりますが、やはり一朝一夕にはならないですよ。やっぱりお金の問題がありましたので、やっぱりシステムですね。今うちはL L教室にもしっかり入っているし、図書館も整備されていますが、ここまで来るのに、やはり7年、8年かかりますので、あきらめないでやっぱり継続でしょうかね。ダイエットだと思いますね。そういうことです。

それでは、もう一方のみ質問があれば承りますので挙手をお願いいたします。

【花井先生】 愛知工科大学の花井と申します。西澤先生、いつもお世話になっておりましてありがとうございます。

また先ほどの話題即ち、フィクションとノンフィクションの件に戻って恐縮ですが、私は定年退職をするまで某カメラメーカーの設計エンジニアとして仕事をしていた関係で、個人的な経験から申しますと、理系的な思考パターンから抜け切らず、読書の傾向として、やはりフィクションというのは日本語で読んでも長続きしないということがありまして、どうしてもノンフィクションを好んで読む傾向が強い様に思います。したがって、工学系の大学生、高専生の中にもそういった傾向の人も多いのではないかと思います。そのような状況で、いわゆるノンフィクションでこういった易しい読み物だとか、それに類したものが世の中にあるのかなというのが私の質問なんですけれども。

【西澤】 あります。本校図書館でも、易しいものからノンフィクションで一通りそろえてありますが、先ほど岡林先生が言われたように、ノンフィクションだけで読んでいける学生は少数派なので、揃えてあるけれど、同一タイトルの複本数は少ないです。やさしいノンフィクションは、ありますよ。

【花井先生】 ありがとうございます。

【神谷】 ありがとうございます。時間も10分ほど延長いたしました。まだ御質問ある場合は、この後まだ私も西澤もずっとここにいますので、個人的に御質問していただければと思います。

本日は、まず4名の外部評価の先生、忌憚のない評価をいただきまして、どうもありがとうございました。（拍手）

そして、さらにいろいろな意見、コメントをいただきましたフロアの皆様にも、厚く深く御礼申し上げます。どうも皆様、ありがとうございました。（拍手）

【補足回答】（口頭では未回答の外部評価委員の質問に対して）

Q1 E科の場合は上級生が下級生へアドバイスシステムというのがありますが、他学科への導入を考えておられるのか、あるいはその可能性があるのでしょうか？（成瀬委員）

A1 取組では、H20, 21年度に、E科の上級生が昼休み、または、放課後に図書館で待機し、全学科の下級生の選書を援助する体制を試しました。しかし、これを利用する下級生が少なかったため、H22年度には取りやめました。代替手段として、ホームページ上で選書指導をする多読学習支援システム「[tadoku navi](http://orchard.ee.toyota-ct.ac.jp/tadokunavi/)」. (<http://orchard.ee.toyota-ct.ac.jp/tadokunavi/>)を開発し、試験運用を始めています。上級生から下級生への助言としては、今後、学寮および部活動における非公式な指導が中心になると推測しています。

Q2 本日の報告では、実際の授業の様子がわかりにくい。特に、全学展開で、多読授業がうまくいっていないクラスには、どう対処していますか？（国重委員）

A2 授業の様子については、明日の多読授業研究会で、本校弘山から報告する予定です。

Q3 FDはどうしていますか？（国重委員）

A3 多読授業を担当する教員は、多読授業を実践する他校に授業見学に出かけるとともに、日本多読学会を始めとする内外の学会に参加して、本校の授業実践を報告し、他校の実践者との情報交換を行ってきました。また、学内の雰囲気盛り上げるために、その他の教職員、地域の社会人、学生の希望者と対象とするイブニングセミナーを実施してきました。これを契機に、専門学科の若手教職員数名が、自己啓発として多読を始めています。

Q4 多く読むから ACE, TOEIC 得点が上昇するのか、英語力が高いから多く読めるのかについて、伺えますか？（国重委員）

A4 本校のデータで、読書量が 100 万語以上になると、初期の TOEIC 得点が高い学生も低い学生も、同様に伸びることがわかっています（例えば、資料 18）。もちろん、英語力の高い学生は多く読むことができますが、多く読めば英語力が低かった学生も伸びていますので、多く読めば ACE, TOEIC 得点は上昇すると言ってよいと思います。ただし、読書量が少ない場合には、多読の効果を測定できません。本報告でも、読書量が 31 万語にとどまった本科 3 年生の TOEIC 平均点は、上昇していません。

Q5 100 万語を読ませるのに、1 年 10 万語で 10 年かけるのと、1 年 25 万語で 4 年かけるのと、どちらの効果が高いのでしょうか？（国重委員）

**A5** 1年10万語では、在学中に100万語読むことができないので、後者の方が高い効果を得られると言えましょう。ただし、1年25万語で4年読むのと、1年で100万語読むのでは、前者の方が効果が高い気がします。というのも、高専生が1年でいきなり100万語読もうとすると、どうしても英文レベルの高い（全文の長い）本を、理解度の低いまま無理して読むスタイルになりやすいからです。理解度が低い読書では、多く読んでも効果が上がらないことは、本報告の図9からも分かります。

**Q6** 同じ本を何回も読むのと、異なる本を次々に読むのでは、どちらの効果が高いでしょうか？（国重委員）

**A6** データがありませんが、我々は、同じ本を何回も読むことを学生に勧めていません。その理由は、同じ本を続けて何回も読むと、読書としての面白みが失われるからです。知識獲得を目指した学習に変質してしまうことを懸念します。多読では、学生が自律的かつ継続的に読書する習慣を作ることが大切で、そのためには、読書を楽しんでもらうことが一番です。

## 取組担当者

事業推進代表者	校長	末松 良一
事業推進責任者	電気・電子システム工学科教授	西澤 一
事業分担者	一般学科（英語）名誉教授	深田 桃代（H20～21年度）
	一般学科（英語）教授	長岡 美晴
	一般学科（英語）教授	高橋 薫
	一般学科（英語）教授	神谷 昌明
	一般学科（英語）教授	鈴木 基伸
	一般学科（英語）講師	中川 聡
	一般学科非常勤講師	弘山 貞夫
	一般学科非常勤講師	浅井 晴美
	一般学科非常勤講師	小柳津 佳世
	一般学科非常勤講師	藤村 すみゑ
	電気・電子システム工学科准教授	吉岡 貴芳
	電気・電子システム工学科准教授	伊藤 和晃
	図書情報係長	三浦 秀喜
	図書情報係	三浦 芳野
	図書情報係	田中 絢子
	図書情報係	岸田 梨江
	企画・地域連携係長	安藤 元良
	企画・地域連携係長	林 明美（H20～21年度）
	企画・地域連携係	岡部 法子
	多読 GP 事務局	野々山 睦美

## おわりに

事業推進責任者 西澤 一

創立以来、英語を苦手とする高専生の現状と、近年、海外との接点が増え続ける日本人技術者の実態とはギャップが広がりつつあり、放置することは高専教育にとり致命傷になるという考えが、本取組の根底にありました。高専の英語授業時間は高校・大学ルートに比べて短く、大学受験のない学生は英語学習動機が弱かったのは事実ですが、状況を改善できない言い訳にはなりません。高専には、ものづくりへの熱意を持つ学生と、新しい教育手法を5年一貫教育の場で実践できる場が与えられているからです。また、JABEEが提唱した学習の達成度を問い、卒業生の質を保証しようとする教育改善のしくみも活用できます。

本取組では、本校が2002年から取り組んできた「多読・多聴による英語教育改善」を全学に展開し、3年間実践しました。英語教員と専門学科教員が連携し、長期継続の多読・多聴授業を組み込み、環境整備と学内の雰囲気作りを進めれば、数単位のカリキュラム変更で、平均的な高専生の英語運用能力を顕著に改善できることを示すことができましたと考えています。取組の成果には明暗があり、更なる改良の余地はありますが、「英語のできる高専生」育成への一モデルを提示できたのではないのでしょうか。

また本取組を通じて、大学受験を軸とする日本の学校英語教育の限界も見えた気がします。中学校における3年間の英語学習があれば、その後は、文法・語彙学習のみにこだわるのではなく、多読・多聴のように楽しみながら英語を使う体験型の学習活動を加えた方が、長期的な学生の英語運用能力は着実に伸びます。グローバル社会で活躍する技術者の英語運用能力育成には、高校・大学ルートよりも、5年一貫教育の可能な高専の方が有利ではないか、とさえ感じます。本校では、GP事業後も多読・多聴授業を継続し、その有効性を実証していきたいと考えています。

本取組は、教育GP事業選定前から、高木不折前校長、末松良一校長のリーダーシップの下、図書館を中心とする本校事務職員の強力な支援と、新しい試みを応援してくれた電気・電子システム工学科の教職員、および、本校図書館を活発に利用して下さった地域の皆さんに支えられてきました。中でも、多読授業導入時から指導いただいた電気通信大学の酒井邦秀先生、豊富な多読用図書体系を整備し供給ルートを開拓されたSEGの古川昭夫先生とSSS英語多読研究会の皆さん、多読授業実践の共有に道を開いて下さった近畿大学の高瀬敦子先生と日本多読学会の皆さんには、特に感謝したいと思います。

本報告が、学生・生徒の英語運用能力向上を目指す他教育機関、生涯学習として英語を学んでいる社会人の皆さんの参考になれば、大変嬉しく思います。